

# JASIS

## NEWS

# No. 51

2013/3/31

## 日本インテリア学会会報

### ■会長挨拶

#### 第24回大会を終えて

学会長 直井英雄（東京理科大学）

本大会は、2012年10月27日（土）、28日（日）の両日に仙台市の東北文化学園大学で開催されました。充実した学術的催しと秋の仙台を満喫できたすばらしい大会だったと思います。大会長の野崎淳夫先生をはじめ、実行委員会の皆様に深く感謝する次第です。

年1回開かれるこの大会は、いうまでもなく、学会のもっとも重要な行事のひとつです。日ごろは、個人、あるいはそれぞれのグループや機関で別々に取り組んでいるインテリアに関する研究・教育や実践活動をふまえて、年1回、一堂に会して成果を発表し、情報交換をする。そして、その結果得られた新たな課題をそれぞれ持ち帰って、また、日ごろの活動に生かす。これこそ学会行事のなかのいわばハイライト、「インテリア学」発展のためのきわめて強力な駆動輪といってもよいでしょう。ともあれ、その大会が盛会であったことに、まずはほっとしています。

ところで、本年度の大会テーマは、「建築環境工学とインテリアの融合」ということでした。このテーマに関する吉野博先生の講演も、大変すばらしいものでした。門外漢の私などでも、この問題の全体像と現在の研究の到達点について、少なくともその概要くらいは理解できたような気がしました。

その講演を聴きながらふと考えたのは、インテリア学会のなかに環境工学の専門家がない（あるいは、いたとしても、ひとつのグループとして力を発揮するほどはない）という問題です。「インテリア学」が、さまざま

なインテリアに関する実践活動のための知識体系であるとしたら、環境工学の知識も当然必要ははずです。これは、もちろん環境工学に限られた問題ではなく、材料や構法、建築設備、あるいは建築構造などについても同様にいえる話でしょう。

この問題の解決の方向としては、大きくふたつあるのではないかと考えます。ひとつは、インテリア学会のなかでその分野の専門家を養成する、あるいはその時間がなければ専門家に入ってもらうという方向、もうひとつは、他の領域（建築学の領域であることが多いと思われませんが）の専門家に協力してもらって、その成果をインテリア学のなかに位置づけるという方向です。前の方向は、どう考えても現実的とは思えませんので、後の方向で考えるということになるのでしょうか、その場合は、インテリア学会の中に、その成果の仲介者、あるいは翻訳者としての役目を担う人のいることが前提となります。本学会が協力して作った日本建築学会の「コンパクト建築設計資料集 インテリア」も、文部科学省の工業高校用の教科書である「インテリア計画」や「インテリア装備」も、この後の方向で作られています。

いずれにしても、この問題、つきつめて考えるとなかなか悩ましいのですが、開き直った考え方もなくはないように思います。それは、「インテリア学」の学問分野を狭く限定してしまって、上に述べたような学問分野をすべて「インテリア学」の外の周辺分野、あるいは協力分野としてしまう考え方です。この考え方ならスッキリするし、きわめて現実的なのですが、何やらさびしい気がします。皆様いかがお考えでしょうか。何かの折に、じっくり議論したいものです。

## ■第24回インテリア学会大会概要報告

大会長 野崎淳夫（東北文化学園大学大学院教授）

日 時：平成24年10月27（土）、28日（日）

会 場：東北文化学園大学

本大会では大会テーマを「建築環境工学とインテリアの融合」と定め、遅まきながら準備を始めましたが、私の勝手知らぬ暴走と準備不足に伴う問題が多々あったと感じております。日本インテリア学会員の皆様には、本紙面をお借りして真にお詫び申し上げる次第です。

以下に平成24年10月27日（土）～28日（日）に、仙台市の東北文化学園大学で行われた第24回日本インテリア学会の開催状況をご報告いたします。

大会1日目には見学会と懇親会が行われました。会員有志による見学会は仙台市内の名所や建築物を探索するもので、その案内役をCAD部会長の川島平七郎先生（本会理事）にお願いしました。見学会は短い時間にも関わらず、かなり広範に見学され、充実した企画になったと聞いております。夕刻の懇親会は、TKP仙台カンファレンスセンターで開催され、大会長の直井英雄先生（東京理科大学）、東北支部長の若井正一先生（日本大学）らが祝辞を述べられ、会員相互の密なる情報交換と懇親が成されました。若井正一先生のご指導・助言のもとに、企画した大会がようやく開始できた安堵感を当方はこの懇親会で抱いておりました。また、私どものような建築環境工学を専攻する者でも、門戸が開かれおり、裾の広い学会であることに感銘した次第です。

大会2日目には、開会式、論文発表、卒業作品展と同審査会、理事会、特別講演会、閉会式が行われました。

今回の大会テーマに合わせた特別講演会では、東北大学名誉教授の吉野 博先生が「健康に配慮した室内環境づくり」と題して講演され、難題に対して以下の如く平易に解説して頂きました。

すなわち、ヒトは多くの時間を室内空間で過ごしており、健康で安全に生活するためには、十分な食事や睡眠が必要で、特に室内空気質（IAQ：Indoor Air Quality）を良好に保つことが肝要である。我国においては、1990年代ごろからいわゆる「シックハウス」「シックハウス症候群」と呼ばれる化学物質による室内空気汚染や健康被害が社会問題となった。

シックハウス症候群は多様な症状をもたらし、発症メカニズムなども未解明な部分が多く、また、①建材や家具・日用品などの化学物質発生量、②換気、③化学物質などに対する感受性、④ダニ・カビなど微生物によるア

レルギー疾患など、数多くの影響因子が絡み合う。

そのため、「健康に配慮した室内環境づくり」とは、単に建材、接着剤などのホルムアルデヒドやキシレン、トルエン等のVOC（揮発性有機化合物）の室内での放散抑制を図り、また、適切な湿度の維持、或いは清掃により、カビなどの微生物汚染を防止することにある。

更に、建築物の建材、断熱材、開口部の仕様など、室内における環境構成要素を十分に検討する必要があることなどを、明快に解説されました。

この講演は本大会の研究テーマである「建築環境工学とインテリアの融合」を端的に示す内容であります。講演会では聴衆者の熱心に聞き入る様子が印象的でした。

研究発表は3室、パネル発表は1室で行われ、熱のこもった発表と質疑応答が行われました。卒業制作展には大学・大学院（24名）、短期大学（1名）、専門学校（3名）、高等学校（1名）から29作品の出品があり、直井英雄学会長ら5名の先生方で厳正なる審査が行われ、優秀作品が選出されました。

優秀作品の発表をもって本大会は無事終了いたしました。関係各位のご尽力により、なされた業と実感いたしております。大会長として、ここに真に謝意を申し上げる次第です。

特に、本大会では早野由美恵先生（東北芸術工科大学）、一條佑介先生、二科妃里先生（東北文化学園大学）が副実行委員長を務められ、先生方の多大なるご尽力と本学学生の協力により大会は成立した感が強く、先生方と本学学生に真に感謝申し上げます。

## ■第24回大会研究発表一覧

### A 論文発表部門

#### 【人間工学1】

座長：白石光昭（千葉工業大学）

001 椅座姿勢での作業による椅子の分類の試み；内田和彦（榊岡村製作所・浅田晴之・渡辺秀俊・川島平七郎・小原二郎

002 人体系家具としてのいす・シートにおける評価項目のすすめー圧迫・痛み・しびれと座育ー；上野義雪（千葉工業大学）・上野弘義

003 大学研究室におけるオフィス家具の配置と作業及びミーティングスペースの構築ー大学研究室におけるフリーアドレスファニチャーに関する研究 その1ー；村元萌（早稲田大学）・余語悠里佳・林田和人・渡辺仁史

004 大学研究室におけるオフィス家具の可動性と空間構築パターン—大学研究室でのフリーアドレスファニチャーに関する研究 その2—;余語悠里佳(早稲田大学大学院)・村元萌・林田和人・渡辺仁史

005 インテリアアイテムが自律神経活動に及ぼす影響 室内アクアリウムのリラクゼーション効果と応用;近藤雅之(積水ハウス(株))・中村考之

#### 【人間工学2】

座長:松本吉彦(旭化成ホームズ(株))

006 アフォーダンス理論に基づくデザイン手法の研究;堀口恵梨(工学院大学)・鈴木敏彦

007 インテリア計画から見た階段用異形手摺の使用性評価に関する研究;小俣祐樹(パナソニック エイジフリーショップス(株))・上野義雪

008 公共トイレブースの必要スペースに関する研究;高橋未樹子(コマネー(株))・上野義雪

009 各種生活行為に最適な照度および相関色温度—照度・相関色温度可変型LED照明器具を用いた実験—;片山一郎(近畿大学)

010 LED電球 白熱球 蛍光球の特性と視覚に対する反応;長柄彰子(千葉工業大学)・伊藤靖通・上野義雪

#### 【計画1】

座長:松本直司(名古屋工業大学)

011 母親の育児観と住まいのインテリアの実態について;片山勢津子(京都女子大学)・近藤雅之・中村考之

012 年齢別にみた住まいにおける床の間の有無と利用 東海地方居住者を主対象とするアンケート調査に基づく分析と考察2;永田恵子(名古屋工業大学)

013 2.5世帯同居における単身者個室の実態;松本吉彦(旭化成ホームズ)

014 超高層・高層マンションの居室と収納関係の調査・考察と提案—神戸市・西宮市を調査対象として—;小宮容一(芦屋大学)・井上徹

015 戸建て住宅の長期耐用性に関する考察 その2—長期耐用性能要件からの設計要件の検討—;中村考之(積水ハウス(株))

#### 【計画2】

座長:棒田邦夫(金沢学院大学)

016 空間の自己化とその表出に関する研究 その13 フランス人建築学生と一般学生の比較;松田奈緒子

(大阪産業大学)・加藤力

017 院内助産システムにおける空間の特性に関する研究 その2 計画の相違による助産師の認知の差異について;西山紀子(京都橘大学)・遠藤俊子・神崎光子・前田一枝

018 可変可動式学校家具の提案 可変可動家具によるオープンスペースの有効利用;北古潤(工学院大学大学院)・鈴木敏彦

019 子どものための屋内遊び場利用実態に関する検討 福島県内に立地する屋内子ども遊び場について;高守留珠(日本大学大学院)・若井正一

020 「駅ナカ広場」にみる停留・滞留行動をとるグループ間の距離 —大阪ステーションシティ「時空(とき)の広場」を対象として—;船曳悦子(大阪産業大学)・松本直司・片山一郎

#### 【計画3】

座長:長山洋子(文化学園大学)

021 ツボグルマ再考 住宅と車の新たな関係性の提案;石田貴大(工学院大学大学院)・鈴木敏彦

022 コミュニケーションエリアにおける連想される使い方と実際の使われ方の比較—オフィスのインテリア計画に関する研究—;白石光昭(千葉工業大学)・伊倉祥範

023 太陽熱調理器を用いたガラス窓の温室効果の測定—縁側温室コンサバトリーの設計学的研究—;灰山彰好(建築工房studio HAIYAMA)

024 LRT軌道とアーバン・インテリアとの空間的関わりについて—ヨーロッパでのケーススタディに基づく形態とその境界デザイン—;ペリー史子(大阪産業大学)

025 一次避難環境の改善提案に関する研究;小切山孝治(工学院大学大学院)・鈴木敏彦

#### 【教育】

座長:鈴木敏彦(工学院大学)

026 模擬家屋を用いた内装施工実習に関する一考察 II;小川和彦(広島職業訓練支援センター)・加島守・坂元愛史

027 美術館の展示体験を目的としたバーチャル・ミュージアム・キットの製作;松崎元(千葉工業大学)・赤坂拓郎

028 建築雑誌に掲載された事例分析 自主的な学生の活動を支援する大学施設の空間構成と運営に関する研究 その1;木村実香(広島工業大学)・平田圭子

029 事例研究対象大学へのアンケート調査の分析

自主的な学生の活動を支援する大学施設の空間構成と運営に関する研究 その2；平田圭子（広島工業大学）・木村実香

030 インテリア製図通則（第1次案）に関するアンケート調査 インテリア製図法の標準化に関する研究 2-1；河村容治（東京都市大学）・奥田宗幸・岡田悟・川島平七郎・長山洋子

#### 【歴史・現代インテリア】

座長：平田圭子（広島工業大学）

031 モダンデザインの背景を探る その5 30年代英国ロンドンにおけるコスモポリタンの活躍；塚口眞佐子（大阪樟蔭女子大学）

032 ヨーゼフ・フランクの空間デザインにおける幾何学的文様について—ヨーゼフ・フランクの建築作品における空間的特質に関する研究 3-；八代美智子（名古屋工業大学大学院）・河田智成・河田克博

033 1960年代に書かれた資料から見る「テクニカル・アプローチ」について—前川國男の建築思想に関する研究 2-；中尾沙矢香（広島工業大学大学院）・河田智成

034 現代インテリアに関する研究 その2 現代インテリア作品の予備的分析；長山洋子（文化学園大学）・大内孝子・川島平八郎・齋藤裕子

## B パネル発表部門

#### 【パネル】

座長：松崎 元（千葉工業大学）

035 インテリアにおける地産地消の試み；早野由美恵（東北芸術工科大学）

## ■第24回大会研究発表講評一覧

### A 論文発表部門

#### 【人間工学1】

座長：白石光昭（千葉工業大学）

001 従来のプロトタイプを作業内容の視点から再整理を行うことを目的とした基礎研究である。作業内容から再整理することは、椅子づくりの基礎的な資料として有用であると思われる。ただ、ユーザー側に立てば、最終的には用途の方がイメージしやすいと思われるので、ま

とめる際にはこの点を考慮していくべきではないかと思う。なお、実験2においてアンケート調査を行っているが、被験者の身長差が大きいため、今後被験者数を増やし、より定量的なデータ化が望まれる。

002 本研究は、筆者のこれまでの座り心地の研究のもとに、座り心地の評価項目について重要度を設定し、一般ユーザーが座り心地を判断できる評価項目を「圧迫、痛み、しびれ」等のクッション感に関わることでありとまとめている。また、これとともにユーザー教育の重要性に言及している。作る側はそれなりに考慮しているが、常に正しい方向を向いているとも言えない。また、選択する側の知識が不十分な場合は、技術の進化は意外に遅いものになり、ひどいときには退化する可能性もある。いすに限った事ではないと思うが、本論の指摘は非常に重要と考える。

003 004 本研究は、「大学研究室内のフリーアドレスファニチャーに関する研究」を主題とする関連研究である。具体的には、ユーザーが主体的に家具を利用する点に着目し、大学の研究室という限定された空間に適した家具のレイアウトや実際の作業内容を調べたものである。写真撮影データをもとに使用頻度マップを作成し、個人作業・ミーティングにおける滞在場所の頻度の高低を求め、作業内容や家具の種類等により滞在場所が異なる事を明らかにしている。また、その際ユーザーが家具の位置を変えていることも明らかにしている。ユーザーがどのように家具を動かすのか、そこにどのようなルールがあるのかを明らかにすることは重要と思われる。なお、空間（ドアの位置、窓の位置、空間の広さ等）からの影響も相当大きいと思われるので、今後はそれらとの関連についても研究を進めていく必要がある。

005 既存研究から「癒される・落ち着く」とのデータが得られている、室内に設置されるアクアリウムがどの程度の癒し効果があるのかを、心電図とアンケート調査データから、定量的に求めようとの研究である。結果として、アクアリウムの有無では有意な差があり、被験者に肯定的な感情が得られることを明らかにしている。今後は、他のインテリアエレメントと比較し、アクアリウムの設置コストと他のエレメントのコストなどの視点も含め、総合的な効果を求めていく等が必要と思われる。

#### 【人間工学2】

座長：松本吉彦（旭化成ホームズ㈱）

006 は、アフォーダンス理論に基づいてデザインの意図を読み解こうとしたものである。本来の用途に加え付加価値をアフォードしている例に注目しているが、恣意的に集められた数例の分析であり、建築とプロダクト作品に用いられる手法の特性を一般性を持って明確化できなかったことが惜まれる。研究の視点は可能性のあ

るものであり、デザイン手法の研究としての今後に期待したい。

007 は、階段手摺の形状を、災害時を想定して視覚を遮断された場合も含め、迅速な移動が可能かどうかという視点で評価したもので、停電節電という現実即した視点が新しく、設備に頼らない移動の可能性を広げる研究と言える。実験結果からは一見工夫されたように見える波型手摺の問題点がよく表現され、連続性が重要なことがよくわかる。20代の被験者という制約の中でも、現場の観察に基づく細やかな評価項目の設定によって感覚的な評価をする手法には見習うべきものがある。

008 は、公共トイレースにおける寸法を、持ち込む荷物を想定した歩行軌跡の分析により検討している。図の表現で便器との位置関係がわかりにくい点が惜しまれるが、実際のトイレの使用状態に即した基準作りという新しい視点がまず評価できる。キャリーバックを入れる手順などトイレース内での人間の行動を細かく観察しており、公共トイレの設計上有用な資料となるであろう。紙巻器や洗浄操作部分などの突出物の影響についても今後の研究を期待したい。

009 は、最近普及が著しいLED照明を想定し、好ましい照度と色温度を生活行為別に分析している。団欒と学習といった想定される行為の差や、男女による好みの差が明確に出ている点が興味深い。しかし被験者は実際に生活行為をしているのではなく、そのシーンを思い浮かべながら回答する実験であり、例えば「くつろぎ」という言葉で想像する行為自体が男女で異なる可能性も指摘された。実験空間は演色性を判定しやすいよう彩色された壁であるが、インテリア全体の色調も影響すると考えられ、実際の住空間に近い条件での検証を期待したい。

010 は、LED照明の従来光源と比較しての感覚評価を行っており、高輝度の刺激の強い光であることの問題点を示唆する結果を得ている。被験者の感覚評価と、まばたき回数などの生理的な評価を合わせて、全体としての本質を捉える手法に好感が持てる。LED照明器具のデザインには、従来光源と異なる特徴に対する配慮が求められるのではないかと考えさせられる研究であった。

#### 【計画1】

座長：松本直司（名古屋工業大学）

011 は、住宅がnLDKという概念で標準化されたことに対して、住まい方の多様性に鑑みて疑問を投げるところより研究を始めている。特に、子育て家庭における多様性に着目し、住宅のインテリアと育児感との関連を、首都圏と関西圏の持家居住者への実態調査に基づき分析している。子どもの面倒やしつけ、教育、自立などと、就寝形態や部屋の整理整頓状況などとの関連の分析は興

味深いところである。画一化の傾向をたどった住宅に、育児の観点より多様性の重要性を示す有意義な研究である。

012 は、インテリアスタイル「しつらい」が日本の住宅の魅力を高めているとの観点より、床の間の有無とその利用について年齢階層別に分析を行っている。調査対象は、東海地方居住者である。結果として、73%の人が床の間のある住宅で成育期を過ごし、現在の住宅に床の間のある人は床の間のある住宅で育った人の割合がやや高いという結果を得、「しつらい」としての床の間に對する継承性の存在を確認している。さらなる綿密な分析と、これが全国的に言えることなのかの検証を今後期待する。

013 は、2世帯住宅に単身の兄弟姉妹が同居する住まい方を2.5世帯同居とし、単身者の個室の実態を52例のアンケート調査より分析している。その結果、58%が独立二世帯住宅であり、子世帯と単身者の個室の位置関係は近く、将来の空室利用が可能な場合が多く、女性の方が収納の関係で個室面積が広いこと示し、8.3畳で1.7畳のウォークインクローゼット付き単身女性向け個室の設計事例を示している。住宅の多様なあり方に対する積極的な取り組み姿勢を示すものと言える。

014 は、超高層・高層マンションの収納面積を分析し、ウォークインクローゼットや収納のあり方を提案している。調査は住宅専有面積別に6戸を対象とし、収納の床面積を求め、床面積100㎡以下の住宅では収納面積の割合が10%前後、100㎡以上においてもほぼ同様で、全体的に収納に対する意識が低いとしている。収納室の提案としてウォークインクローゼットと納戸をもつ具体例を示し、収納空間を2割にするためにはウォークインクローゼットと納戸の確保が有効であるとしている。

015 は、戸建て住宅の長期耐用性に関して、メンテナンス性、柔軟性、恒久性、耐久性の4つの性能指標についての設計指針の検討を行っている。具体的には4つの性能指標について、それぞれの考え方、指標としての扱い方等を考察し、これらの性能をマトリクス化することにより性能を満足させるための必要条件を整理している。さらに建物の構成要素の分類と要素ごとの設計要件を整理している。今後、これらの考察を元に具体的な設計指針を得るために定量的な分析が必要であると考えられる。

#### 【計画2】

座長：棒田邦夫（金沢学院大学）

次回に掲載予定

### 【計画3】

座長：長山洋子（文化学園大学）

021 は、建築家・上田篤が著書の中で提案したツボグルマを再考し、住宅の一部として小型化ルーム化した「弱者のための車」に着目した。そして、エネルギーマネジメントを行う省エネルギー住宅「スマートハウス」と「EV」（電気自動車）との新しい関係はツボグルマの提案に近づきつつあるとし、現代のEV技術を用いて住宅と車の新たな関係性実現の可能性を探った。移動可能な部屋は通院や診療などにも便利に使える。高齢社会、介護者不足、負担軽減などを視野に入れた提案である。様々な課題が考えられるが弱者に対するやさしい提案の今後に期待する。

022 は、コミュニケーションエリアの構成要素とその印象・使い方の関係を明らかにする事を目的として、実際のオフィスのコミュニケーションエリアを対象に、連想される使い方と実際の使われ方との差異について調査した。その結果連想される使い方と実際の使い方がかなり一致したことから、事前に連想される使い方を調べることで、どのように使われるか大まかに予想する事が出来るとした。連想される使い方の4段階アンケート調査では既に使用している者が被験者となっている点に若干の改善が求められるが、コミュニケーションエリアの使用目的に合わせたインテリアを計画する上で、このような調査の積み重ねが重要であろう。

023 は、100%パッシブソーラの可能性を追求するため、イギリスのコンサバトリーの導入を目指して性能評価を試みた。太陽熱調理機をイギリスの石煉瓦造住宅の冬期居住性を改善するためにビルトインされエコハウスタイプのコンサバトリーと見立てて、日射下で温度変化を実測し、その集熱効率を推定する実験を行った。

本研究は模型による実験であり、実施時期が7月という点で具体的な提案にはさらに検討が必要であろう。日本のコンサバトリーのあるべき姿を縁側とし、日本の住宅に温室風の縁側が生まれ廃れた過程を考察した「縁側考」とのすり合せを今後の課題としている。日本の気候に対応した提案に期待する。

024 は、アーバンインテリアと人に優しい公共交通LRTとの空間的つながりを探るために、ヨーロッパ15都市におけるLRT軌道とアーバン・インテリアとの空間形態、役割、境界のデザインの特徴を分析・考察した。その結果、LRT軌道と広場などアーバン・インテリアは密接な関係を持ち、空間演出装置が設置され、遊歩空間、憩い空間、交通結節空間、遊び空間が形成されているとした。LRTはヨーロッパ全土の各都市で普及している。今後、LRTを核とした街づくりをどのようにイメージしているのか、都市計画や周辺環境との関係などとともに

さらに掘り下げてほしい。

025 は、避難所の生活環境改善を目的とし、避難所環境を震災後72時間、1ヶ月後、避難所閉鎖までの3つの時間軸に分けてその推移を調査した。一次避難環境に対して提案された改善策を「素材」「構造」「機構」「空間構成」に細分化し、3つの時間経過の中で実現の可能性と空間構成に関わる因子に分け、それら要素が有効であるかを評価した。その結果、時間の経過に伴い有効性が変化することを明らかにし、初期段階から避難所閉鎖までの効果的な提案の手掛かりを示した。評価基盤はこのような丹念な研究から求められるもので一時避難所のあり方を探る上で重要な資料である。

### 【教育】

座長：鈴木敏彦（工学院大学）

026 職業能力開発総合大学校（東京校インテリア科）の内装施工実習内容は、普段大学で建築を教育するものにとって大変興味深い。昨今のCADの弊害は、材料の重さ・固さ・質感等の特性を知らずに、形態がCGとして出来上がってしまうことだ。実際の施工体験は、材料をリアルに感じ、座学の知識を再認識するいい機会となるだろう。このような実習を行う上でも、プロジェクトマネジメントが重要であることが理解できた。

027 バーチャル・ミュージアム・キットは、実際の現場の学芸員にとって展覧会の企画をサポートする有効なツールとなるだろう。展覧会の成否は、展示物の魅力はもちろんだが、インスタレーションによるところが大きい。しかし学芸員にはその素養は問われていないため細かな展示空間デザインは専門のデザイナーにゆだねることになる。もし学芸員がこのキットを利用すれば、展示物のスケールを実感し展示計画をスタディーできるので、デザイナーや施工業者に的確な依頼をすることができるようになるだろう。

028 建築やデザイン系の大学において創作活動を支援する施設に「ものづくり工房」がある。近年では木工室というよりもデジタル・ファブリケーションが主流である。これはCADデータの形状を3次元プリンターやカッティングマシンが自動的に忠実に再現する方法であり、「ものづくり革命」とも言われている。世界各地でFab Lab（ファブリケーション・ラボラトリー）が広まっている現在、日本の大学においても自主的な学生の活動を支援する工房の在り方にも研究の成果が待たれる。

029 大学の木工室では丸鋸や鉋盤等の危険な加工機械を使用するため、専門の技官と学生には事前に基礎的なトレーニングが求められている。一方デジタル・ファブリケーションでは、いったんセットすれば機械が自動的に加工を始めるのでITリテラシーの高い学生が主体的

に安全に作業することができる。しかしいずれにしても機械を扱うことに変わりはなく、コンピューターと加工機器の扱いに秀でた技官が必要である。今後の運営方法に関する報告を待ちたい。

030 建築には、街を形成する役割の都市的側面と人々の生活を内包する空間を創出するインテリア的側面がある。そして都市空間は建築というエレメントで構成されて成立するように、インテリア空間も、家具や照明等のインテリアエレメントがあっちはじめて機能する。しかしインテリアエレメントには建築図法では表現しきれない部分がある。したがって、建築図との整合性を確保した上に、インテリアエレメントのための特別な表現手法まで含んだインテリア製図通則を期待したい。

#### 【歴史・現代インテリア】

座長：平田圭子（広島工業大学）

031 モダンデザインの背景を探る一連の研究であり、本報ではローンロード・フラッツ、ハイポイント、ウィロードの家の3事例を基に30年代英国ロンドンにおけるコスモポリタンの活躍を取り上げている。興味深く読みやすい論文である。ここでのコスモポリタンのありようの違いや背景・因果関係についてもっと詳しく知りたくなる。今後の研究に期待したい。

032 ヨーゼフ・フランクの建築作品における空間的特質に関する一連の研究であり、本報では空間デザインにおける幾何学的文様について考察をしている。特にフランクがジャポニズムを受け入れて新しい作品の創造の契機としたことを述べている。フランクがケルンの東アジア美術館のインテリアデザインを担当したことによってジャポニズムの影響を受けたことは理解できたが、表1や図1、文章だけでは空間の中で日本の文様とされる幾何学文様がどういう位置にありどのような意味を持っていたか少々わかりにくかったが、発表時に写真を見て理解することができた。紙面上にも写真や図面などを掲載することによって読む人の理解を助けると思われる。次報も楽しみにしたい。

033 前川國男の建築思想に関する一連の研究であり、本報では1960年代に書かれた資料から「テクニカル・アプローチ」について取り上げている。対象資料は「建築と都市計画を語る」「座談会1-技術・機能・永遠性」「対談・建築家の思想」「再び都市美について」「私の建築観について」である。そこから前川が「技術」と「芸術」を対比的にとらえ、度合いが異なる「人間精神」にかかわっているものとしている。さらに1960年後半の「技術」は「単なる技術」と「芸術の技術」と変化していったことを考察している。丁寧な考察がされている。先に対比されていた「芸術」の1960年後半の前川のとら

え方の変化はあったのだろうか。また、前稿の「テクニカル・アプローチ」から本稿、次稿へとどのように展開されるのか今後の進展も期待したい。

034 現代インテリアに関する一連の研究であり、本報では現代インテリア作品の予備的分析を行っている。ほぼ300作品から特徴的だと思われる作品を30作品に選定し、Needs（時代背景や要求）、Seeds（時代の新技術や新素材）、Benefit（作品に現れた効果・生活価値）とUser（ソフト）、Supplier（ハード）により分類。またキーワードからのその特徴をAインテリアと外部空間との関係づけ、B主用途以外の主張、C新々手法からも分類している。この研究は歴史の中での現代インテリアの位置づけを明確にするものであり興味深い。今後を期待したい。

#### B パネル発表部門

##### 【パネル】

座長：松崎 元（千葉工業大学）

035 「インテリアにおける地産地消の試み」と題した早野氏による発表で、献血ルームの実施設計をおこなった経緯と成果の報告をまとめたものである。地元大学との連携、学生への教育効果、震災復興に関わる人材不足など、質疑応答の内容からは、計画と実施の難しさが伝わり、パネル発表の題材としても大変有意義なものであった。計画から施工への過程はいずれも大変興味深いもので、展示会場では発表時間終了後も熱心な議論が続いていたのが印象的である。近年、クライアントからの要望として、地域性の考慮や産学連携の要望が上がるケースも増えており、今後、数年に渡る施設の使用状況と利用者への評価に関する調査報告を期待したい。

#### ■大会時有志見学会

川島平七郎（現代インテリア研究会代表）

第24回（仙台）大会は、東日本大震災後初めて東北で開催するインテリア学会の大会であった。大震災は地震・津波・原発の3重苦をもたらし、被災地だけではなく広く私たち日本人にとって、いや些か大げさを恐れずに言えば、世界の人々に現代文明の有り様を考えさせる衝撃波となっている。期待していた仙台大会の見学会はない、と聞いた時に多くの人が感じた失望は小さくはなかった……。しかし、その衝撃を真正面から受け止めるためには、もう少し時間が必要なのかもしれない。

あれから1年半後の今、折角被災地を訪ねるなら、震災の現実と復興の進展を関係者から直接聞き、自分の生目の目で見てみたい、ただこの想いから自前の見学会をしてみようと考えた。私たち「現代インテリア研究会」は、デザインの近代史を学んで社会に出て仕事をしてきたが、「現代のインテリアとは何か」を考えるのに被災地ほどふさわしい場はないであろうから。

見学対象は、現代インテリアとして著名な建築の被災現場にいた人から、何が起こり、どう動いたのか聞きたい、そこで東北工業大学とせんだいメディアテークを訪ねることとした。なお、仙台市の復興計画の現状がどうなっているか、仙台南地区を見て市の担当者から聞きたかったが、今回は実現できなかった。

東北工業大学（環境情報工学部 設計：二瓶博厚同大学教授（当時））は、震災前の2003年の竣工で、構造的には高層の制震構造であり、設備的には太陽光発電や屋上緑化・雨水利用などパッシブやアクティブの省エネ・省資源を実現している。これらの違和感を生みやすいエレメントは、モジュールの徹底と繊細なディールにより建築的・インテリア的に消化されていた。設計監理を担当された佐藤究氏の説明は的確で、細部の形の意味や竣工後のキャンパスの一体感などがよく理解できた。また、周辺の自然環境に配慮した高さの抑制、既存の建物を視覚的に融合させるキャンパス・プランニングなどが評価されて、JIA環境建築賞など多くの賞を受賞している。

メディアテークは、伊東豊雄氏の設計で2000年に竣工し、そのチューブ構造は現代建築・インテリアとして、世界の注目を浴びた、あまりにも有名な存在である。大震災ではその一部が被災して特にひどかった7階は長期にわたり閉鎖された。

震災2ヶ月後（2011年5月）、キックオフイベント「歩きだすために」は、鷲田清一、伊東豊雄氏らも駆けつけ、1階の広場で開催され、ガラスのファサード越しに街路にできた小舞台と一体になったトークイベントとなったという。

案内者の庄司氏は、地下の活版印刷機や屋上のエレベータ機械室まで案内し、被災時の状況を説明して下さった。被害のひどかった7階は（2012年1月27日）復活しており、5階のワークスペースを利用して被災写真を市民から広く集める活動も行われていた。被災時のメディアテークの落下した吊り天井、仕上材の破損などが見て取れたが、無事だった書籍や映像・音響資料は元通り見られるようになっていて、当初の想定通り、市民の情報生活の核として、物理的にも精神的にも機能していることが確認できた。

最後になりますが、急遽計画した有志見学会であったにもかかわらず、学会本部からご支援を頂いたことに心

より感謝したい。

インテリア学会第24回大会 有志見学会

（主催：現代インテリア研究会）

日時：2012年10月27日（土）12:30～17:30

見学先：①東北工業大学環境情報学部（教育棟・研究棟）

設計者：二瓶博厚 同大学教授（当時）

説明者：佐藤究（設計監理担当者） 関空間設計

②メディアテーク（特に被災と復帰の状況）

設計者：伊東豊雄

説明者：庄司武夫

集合：仙台駅西口バスターミナル11・22番乗り

参加者：7名

時間割：12:30～13:00 バス移動

13:00～15:00 東北工業大学見学

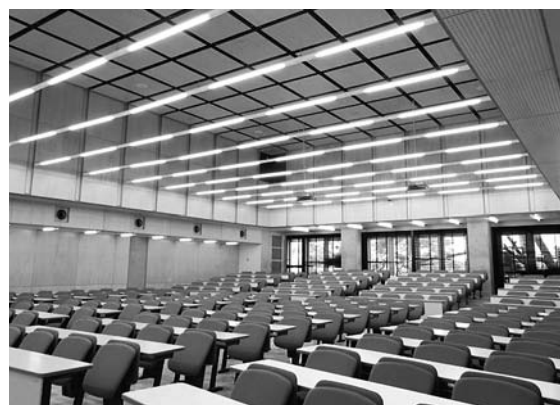
15:30～16:00 タクシー移動

16:00～17:30 メディアテーク見学

解散

参加費：資料費500円、交通費各自負担

【当日写真 提供：長山洋子氏】



東北工業大学 環境情報工学科 教育棟大教室  
吊り天井・照明とも大きな被害はなかった。



同 研究棟

制震構造：粘弾性物質でシールしたオイルダンパーが機能し、大きな被害はなかった。





せんだいメディアテーク

フリースペース：チューブ・カーテンウォール・ガラスプロフィリットにフレームのみの吊り天井などのエレメントは、全て空間の連続性・開放性を演出している。



せんだいメディアテーク

地下室：チューブのパイプの足下は、耐震補強されている。

## ■平成25年度運営委員会だより

### □総務委員会

委員長 上野義雪（千葉工業大学）

今回はありません

### □広報委員会

委員長 湯本長伯（九州大学大学院）

1) 事務ホームページの更新を行った。皆様の情報提供を引き続きお願いします。最近少しずつ、支部・部会・研究会等についても掲載情報を戴き、アップデートの循環が出来かけていると思われま。なおこの事務HPですが、提供していた湯本が、3月末で九州大学を定年退職しますので、4月以降のURLは、未定です。宜しくをお願いします。

<http://www.design.kyushu-u.ac.jp/~ymt1ab/JASIS/>

2) 広報委員会では、インテリア学会メールニュースの発行を続けています（現在49号）。メールアドレス登録者は191名で、過去のニュースはホームページからすべて見る事ができます。皆様の一層のアドレス登録を、お願い致します。

<http://design.kyushu-u.ac.jp/~ymt1ab/JASIS/mailnews.html>

3) 会報は委員会内で連絡が悪く、昨年度は1回しか発酵出来ませんでした。誠に申し訳ありません。過去の会報も、ホームページから見る事ができます。ご活用下さい。

<http://design.kyushu-u.ac.jp/~ymt1ab/JASIS/47.pdf>

4) 広報委員会は、以下のメンバーで活動しております。また広報委員は6名のみで、今もかなり手薄な状態ですので、皆様のご協力をお願い致します。広報委員長：湯本長伯 [九州大学大学院・教授、九州支部長] 編集委員：片山勢津子 [京都女子大学・教授、近畿支部]、渡辺秀俊 [文化女子大学・教授、関東支部]、若井正一 [日本大学工学部・教授、東北支部長]、平田圭子 [広島工業大学、中国支部]、松田奈緒子 [京都工芸繊維大学、近畿支部]。今号の編集委員長は若井委員です。

またHP・メールニュース編集委員長：湯本長伯 [前掲]、広報担当総務委員：白石光昭 [千葉工業大学・准教授、関東支部]です。新しく参加して下さいの方も歓迎しております。どうぞ宜しく、お願い申し上げます。

5) 広報委員会へのご連絡は、下記までお送り下さい。なお4月中は連絡が難しいかと思しますので、予めご承知おき下さい。

[JASISeditor@yahoogroups.jp](mailto:JASISeditor@yahoogroups.jp)

### □国際委員会

委員長 加藤 力（宝塚大学大学院）

今回はありません

### □論文審査委員会

委員長 松本直司（名古屋工業大学）

今回はありません

## ■平成25年度支部だより

### □北海道支部

支部長 小林 謙 (東海大学)

今回はありません。

### □東北支部

支部長 若井正一 (日本大学)

昨秋は、恒例の本会全国大会が震災復興著しい仙台市に立地する東北文化学園大学で開催され、多くの会員の皆様にご参加をいただき、厚く御礼申し上げます。特に、同大会の開催をお引き受けいただいた、東北文化学園大学の諸先生方と関係各位に深謝いたします。

さて、大会終了後、東北支部主催の事業として、下記により特別公開講演会を開催いたしました。

\*\*\*\*\*

- ・日時：平成24年11月16日 (金) 14:30～16:30
- ・会場：日本大学工学部講義棟 (福島県郡山市)
- ・演題：建築家の使命、三浦敏伸 VS 本間利雄



特別講演の建築家 (右：三浦氏、左：本間氏)

\*\*\*\*\*

当講演会の参加者は、約120名でした。山形を代表する本間設計事務所を主宰する本間利雄氏と、レーモンド設計事務所を主宰する三浦敏伸氏の2大建築家の建築談義と豊富な作品のスライド上映には、参加者一同大いに魅了されました。今後も、機会があれば、東北支部主催の公開講演会を開催したいと存じます。

### □北陸支部

支部長 棒田邦夫 (金沢学院大学)

今回はありません。

### □関東支部

支部長 山田智稔 (前相模女子大学)

今回はありません。

### □東海支部

支部長 建部謙治 (愛知工業大学)

今回はありません。

### □関西支部

支部長 小宮容一 (芦屋大学)

東北文化学園大学での第24回大会には関西から10題の発表がありました。関西パワー健在です。懇親会後の二次会は、仙台の「牛タンづくし」で多いに盛り上がりました。飲食にも元気な関西会員です。

11月17日(土)に東京大学大学院在学中の富安亮輔君を大阪に招いて、大光電機(株)ショールームで「コミュニティケア型仮設住宅の取組み-岩手県釜石市と遠野市-」と題した講演会を実施しました。仮設住宅としては新しい取組みの「玄関向かい合わせ型配置」「縁側デッキ」「サポートセンター設置」「子育てゾーン」等に興味が持たれました。富安君は「コミュニティケア型仮設住宅」の研究チームのメンバーとして、提案から建設、運営に関わり、昨年6月から現地に滞在し、入居者の変化、コミュニティの変化をつぶさに観察・研究され、その生の体験話しは、神戸の震災経験者の私には多いに参考になりました。講演の後、立食で懇談会を持ち、会員他参加者が富安君を囲んで、それぞれに質問・意見を交換し仮設住宅について議論しました。

この紙面をお借りして富安君をご紹介していただいた西出和彦先生にお礼申し上げます。

関西支部では年1回の講演会と年1回の見学会を恒例の事業としています。次の見学会は年度末の3月に、現在神戸のポートアイランドに建設中の小児癌患児と家族が治療中も生活を共に出来る「チャイルド・ケモ・ハウス」を検討中です。2月にはご案内出来ると思います。遠方からもご参加下さい。



「仮設住宅の取組み」を講演する富安亮介氏

## □中国・四国支部

支部長 平田圭子（広島工業大学）

### 1. 第15回ミニレクチャー\*開催

題目：「これからのデザインを考える」

講師：橋本和幸 氏（東京芸術大学）

月日：平成24年11月16日（金）

時間：18:30～20:00

場所：広島市まちづくり市民交流プラザ

橋本和幸氏は、元 鹿島建設㈱ にて多くのホテルのインテリアデザインを手掛ける。参加者は、学生・専門学校生11名以外に学会員・社会人11名の、計22名。鹿島建設㈱時代のホテルオーナーのこだわりとデザインの摺合せの話や、福島第一原子力発電所事故とデザインの話、現在の東京芸大でのワークショップの話など幅広い視点からインテリアデザインについて語って頂いた。

\*ミニレクチャーは、学生向けの講演会・実習。理想的な話だけでなく、現実的な失敗談や苦労話などをしっかり盛り込んだ内容を講師に話してもらおう。ほぼ年2回開催

### 2. 2013インテリア系新春講演会・合同新年会（協賛）

題目：『「逆転の発想」

～里山資本主義で豊かなエコライフ～

講師：和田芳治 氏

（人間幸学研究所所長、元広島県総領町教育長）

月日：平成25年1月30日（水）

時間：16:30～18:00

場所：メルパルク広島5階

主催：広島インテリア協議会

（公社）インテリア産業協会中国支部

### 3. 見学会

見学：「広島市立広島特別支援学校」

月日：平成25年2月23日（土）

時間：10:00～12:00

場所：「広島市立広島特別支援学校」

平成24年9月に広島市中区から南区出島に移転した「広島市立広島特別養護支援学校」は、平成20年度に開催された「広島市特別支援学校移転改築工事設計者選定」プロポーザルコンペにて株式会社佐藤総合計画が選出された。総事業費が84億5千万円、農園を含む敷地面積は約2万5千㎡。農・園芸作業室、クリーニング実習室、食品加工室、接客・販売実習室、スノーブレン、機能訓練室、温水プールなど施設・設備が非常に充実した施設である。

## □九州支部

支部長 湯本長泊（九州大学大学院）

2012年11月30日に、九州地域のインテリアコーディネーター協会を中心に、一般社団法人・日本インテリアコーディネーター協会・インテリア研究学会等協議会が設立されました。日本インテリア界の今後に少しでも役に立てるようという意図での設立ですので、九州支部としては大いに注目すべきことと考え、協力および参加を検討した結果、学会への協力も大いに期待できることから、参加を決定致しました。

既にメールニュースでもお知らせしましたような経緯を踏まえ、また今後とも多くの学協会と協力しなければ活動が成り立たないことを踏まえつつ、出来る限りの幅広い協力関係を形成して行きたいと考えています。

さらに今後動きがありましたら、改めてご報告をしたいと思います。

また九州支部ですが、会員数の減少とインテリア系学校の衰退のため、なかなか苦しい状況です。また現支部長の湯本が九州大学を定年退官するため、後任の支部長をお願いしているところです。

支部活動としては今年度も他のインテリア関係団体と十分連携して活動することとし、九州IC協会協議会・インテリア産業協会主催の『インテリアフェスタ』（3月6・7日）にも引き続き協力し、インテリア系の異業種交流会（3月2日）や講演会も開催する予定である。

次に、地元の福岡インテリアコーディネーター協会と連携して、このところ力を入れているエンドユーザーへの働きかけ活動を報告致します。なかなか単独の活動を展開できないが、多方面での連携を活かして活動したいと思います。

### ■学生向け 職業体験ワークショップ報告

1月26日土曜日九州大学大橋キャンパスで行われ、10名の学生さん方がはじめてのプレゼンボー

ド作成に挑戦してくれました。

最後に九州大学の湯本先生が講評を一人一人された後、のびのびと個人のよいところを更に伸ばして行ってほしいと総評いただきました。

生徒さんからの感想を以下に掲載します。

●高校生2年生・女性

今回の講習、とても勉強になりました！

私はデザインの勉強はかじりましたが空間デザインやインテリアは全くしたことがなかったので正直不安でした…。でも、楽しく参加することができてよかったです！プランのカラージュはとても気に入ったので、家でも自力でやりたいと思います。来年、無事大学が決まったらまた参加させていただきたいです。ありがとうございました。

●大学1年生・女性

今回私が参加したきっかけは学校のポスターを見たからです。大学では工業デザインや人間工学について勉強しています。将来は人間工学を生かしたものづくりをしたいと考えています。まだまだ勉強中でいろんなことに興味があり、今回のインテリアコーディネーターという仕事にも興味があったので、参加しました。インテリアコーディネーターの方の説明からワークショップは始まりました。爽やかでコミュニケーションが大切な仕事というのがその段階でわかり、流石だなと思いました。ワークショップでは、私は初めてで全く作り方もわからなかったのですが、プロの方に声をかけていただき、アドバイスをもらいながら楽しく制作することができました。他の方の発表をきくのが一番おもしろかったです。もっとつっこんで話を聞いてみたくなりました。最後には先生に一人一人講評までしていただき、よい経験になり参加してよかったと思いました。自分の作品の発表の仕方というのも重要で、もっと経験を重ね、うまくなりたいと思いました。おつかれさまでした。ありがとうございます。

●大学3年生・女性

今日はインテリアコーディネーターの方に色々とお話を伺え、実際にプレゼンテーションボードも作ることができ、楽しく作業ができました。タイルや壁紙、カーテンなどの素材をあんなにもたくさん目にする機会なんてそうそうないので、それだけでも貴重な体験でした。インテリアコーディネーターの試験は難しいですが、もう一度挑戦してみようと思います。

次回をもっと詳しく皆さんのお仕事について教えていただきたいです。ありがとうございます。

●社会人・23歳

先日はセミナーに参加させて頂き、ありがとうございました。新しい素材を知る事で、新しい提案ができるという事に気づかされました。素材を知る＝提案の幅が広がる 組み合わせは、無限大だと感じました。また、要素を入れすぎず、間引く工程に気を付けて行きたいと思いません。今後も新しい素材に目を向け、様々な提案ができるよう精進して参ります。現在サカイリブを使って面白いエントランスが出来ないかと考えております。いろんなエントランスを考案し、福岡の町をおしゃれにしていきます。

下図は、連携している福岡インテリアコーディネーター協会の活動をまとめたポスターです。

これからも、地域内での連携を大切にしながら、インテリア文化の振興に努めて行きたいと考えています。



## ■研究部会だより

### □研究協議会

議長 栗山正也 (KDアトリエ)

今回はありません

### □歴史部会

幹事 河田克博 (名古屋工大)

今回はありません

### □計画・構法・デザイン部会

部会長 栗山正也 (KDアトリエ)

今回はありません

### □人間工学部会

部会長 白石光昭 (千葉工業大学)

昨年度は研究会を開催できず、ご迷惑をおかけした  
が、今年度は何とか実施する方向で予定を立てていま  
す。現在、TOTO株式会社様のテクニカルデザインセン  
ターの見学、及び有限会社ゴンドラ代表小林純子様  
の講演を予定しております。テクニカルデザインセン  
ターは新しくオープンされた下記ショールームと同じビルにあり  
ますので、ショールームもぜひ見学していただければ  
と考えております。

近々、ご案内を差し上げられるようになると思いま  
すので、ふるってご参加ください。

日時：2013年3月25～29日の間で交渉中

場所：東京都渋谷区代々木2-1-5 JR南新宿ビル  
(なお、大変申し訳ありませんが、同業他社の方はご遠  
慮ください。)

### □教育部会

部会長 河村容治 (東京都市大学)

### 第19回卒業作品展および巡回展の開催

2012年10月28日(日) 10:00～16:00東北文化学園大  
学1号館2階レクレーション2にて、大会本部との共同  
で第19回卒業作品展を開催した。全国の大学・短大・専  
門学校23校から選ばれた卒業制作の作品27点を展示し  
た。同日、開かれた審査委員会で優秀作品を選出した。  
大会に引続き、本年も立川ブラインド工業(株)の協賛  
で、タチカワ銀座スペースAtteにて、12月13日(木)～  
16日(日)に巡回展を開催し、好評を博し多数の来場者  
があった。最優秀作品賞(多摩美術大学 田中悠史)の

実物作品(写真参照)の展示を予定していたが、作品の  
サイズ大きく会場に搬入できないことがわかり断念し  
た。展示していれば随分と話題になったであろうと思わ  
れる。

### 卒業作品展優秀作品の選出

10月28日(日) 11:00～12:00展示会場にて審査委員会  
を実施した。まずインテリアを意識した作品を選抜する  
こと、また特定のジャンルに受賞が偏らないように配  
慮することなどを共通認識とした。次に各審査員の推  
薦により以下9点、武蔵野美術大学「100年-10年-ひと  
とき」、京都女子大学「つつみこむ-光と人の吸収」、多  
摩美術大学「CROSS SHELF」、女子美術大学「いわのや  
ど-岩遊び-いわあそび-」、日本文理大学「韓流ドラマ  
と日本のドラマにおける住まい方の国際比較」、名古屋  
芸術大学「ヨムトコロ-本のある暮らしの提案」、名古屋  
工業大学「名もなき風景はマチをつむぐ」、愛知産業  
大学「View toilet ～安全で楽しい公共トイレのデザイ  
ン～」、広島大学「仮設×水辺」を候補作品としてノミ  
ネートした。審査員より各作品の候補にあげた理由をそ  
れぞれ述べ、相互に議論を重ねた上で投票に移った。そ  
の結果、「CROSS SHELF」が満場一致で最優秀賞として選  
ばれた。「いわのやど」と「ヨムトコロ」がそれぞれ3  
票を獲得し優秀賞とした。「100年-10年-ひととき」と  
「つつみこむ」は、それぞれ2票を獲得し次点となった。  
また委員長の提案で「韓流ドラマと日本のドラマにおけ  
る住まい方の国際比較」は作品ではないが興味深い研究  
であり、今後このような形式の出展も期待する意味で奨  
励賞とした。

本年の傾向は、家具で空間との関係を明らかにしたも  
の、家具とインテリアの中間的なもの、建築でも単体で  
完成するのではなく環境との関係を意識したものなど、  
ものと空間、空間と空間の関係をインテリアとして捉え  
た作品が目立った。

「CROSS SHELF」は、細い木材で構成された棚で間仕切  
りとしても使える。4つのパターンの格子を重ねること  
で、繊細でかつ深みのある表情をつくっている。ありそ  
うでいていまだかつてなかった美しい作品として評価が  
高かった。「いわのやど」は、環境を意識した空間作品  
で、岩のごつごつした感じがプランや細部にうまく表現  
され、楽しい作品に仕上がっていた。「ヨムトコロ」は、  
住宅の6つの空間に適した読書するための成形合板によ  
る6つの家具の提案である。コンセプトが優れていて、  
作品の完成度が高く、プレゼンテーションに工夫がみら  
れた。

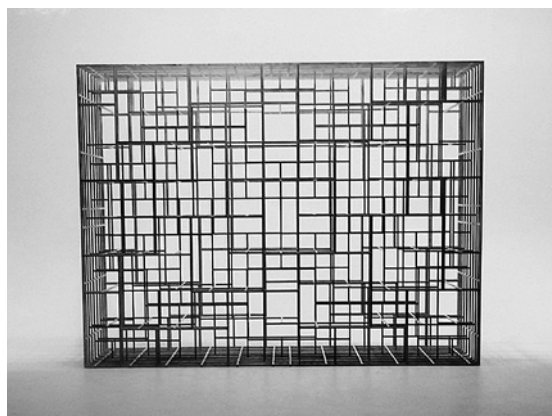
[審査委員会]

審査委員長：直井 秀雄 (学会会長)

委員：大会実行委員長 野崎 淳夫  
大会副実行委員長 早野由美恵  
教育部会長 河村 容治  
教育部会幹事 植松 暉子

#### [受賞者一覧]

- ・最優秀作品賞：多摩美術大学  
環境デザイン学科 インテリアコース  
田中 悠史 「CROSS SHELF」



- ・優秀作品賞：  
女子美術大学 芸術学部 デザイン学科 鈴木 麻紗子  
いわのやど「岩遊び ーいわあそびー」  
名古屋芸術大学 デザイン学部 デザイン学科  
スペースデザインコース 大久保 圭  
「ヨムトコロ ー本のある暮らしの提案ー」
- ・奨励賞：日本文理大学 工学部 建築学科 金 ユリ、  
金 イナ 「韓流ドラマと日本のドラマにおける住ま  
い方の国際比較」

#### □CAD部会

部会長 川島平七郎 (元東横学園短期大学)

今回はありません

#### □インテリア学大系【最終報告】

委員長 湯本長伯 (九州大学大学院)

大系特別委員会は、2012年度に役割を終え、解散することとしました。下記に経緯を記します。また詳しくはホームページに掲載されていますので、ご覧下さい。

##### [2011年度報告]

大系特別委員会は、2011年度末に大きな活動転換を決定した。経緯は以下の通り。1. 内容を検討しつつ議論を重ね、数10回の会合を重ねて来た第一次検討活動は、結論として魅力的な出版計画としてまとめられ、会報や

シンポジウムでも発表したが、その計画に関心を示す出版社がなく、終にこの形での出版を断念した。2. 2011年度に、学会の出版計画を出版社に受け入れて貰うことは構造的に無理があると考え、これまでの出版計画を一旦断念し、今後はインテリアの本質に関する記述は守りながら、我が国インテリアの特徴的成り立ち(黎明期の歴史)等も含めて読者が興味を持って読めるような形式の出版計画に転換することとし、その主要な執筆者(ヒアリングにより原稿を起こし、その編集という形で最終原稿を得る予定)である松本哲夫、栗山正也両氏の賛同を得た。また出来る限り小原二郎氏からもヒアリングさせて戴く計画とした。3. この形式での我が国インテリアに関する体系的な記述を行うには、残された時間に限りがあると考え、本年度に集中的にヒアリングを行い、出版社とも集中的に交渉と出版に関する共同作業を行う計画である。4. なお特別委員会として、設置以来かなりの期間を経過しているため、予算等の関係で本年度に活動が行えないようであれば、本(平成24)年度末で特別委員会を解散し、インテリア学会としては「大系出版」を断念したいと考えている。

上記のような報告を会報50号にて行ったところであるが、その後開催された「研究協議会・幹事会」において、余り大きな方針変更は「インテリア学大系・刊行特別委員会」のミッションを越えているという指摘があり、協議の結果、本特別委員会は速やかに解散することとなった。なお上記のような、「我が国インテリアの特徴的成り立ち(黎明期の歴史)等も含めて読者が興味を持って読めるような形式の出版計画」については、別途形式を変えて準備することにチャレンジすることとなった。現時点では「我が国インテリアの成り立ちとこれからのインテリア計画・設計」(仮題)といった名称として、刊行を目指す準備をして行くこととしたい。

最終的に、それぞれ学会会報に掲載したその時点時点の委員会報告を経緯として示し(再録は致しません)、特別委員会の最終報告とさせていただきます。

#### ■ H24年度 第2回理事会議事録

総務委員長 上野義雪 (千葉工業大学)  
記録 松崎 元 (千葉工業大学)

日 時：平成24年10月28日(日) 12:20~13:00

会 場：東北文化学園大学

出席者：直井、西出、上野、片山、川島、河村、小宮、白石、鈴木(敏)、建部、日原、平田、棒田、

松本（直）、松本（吉）、山田、湯本、若井、渡辺（早野、松崎、押切、長柄）

配布資料：

- 1) 平成24年度第2回理事会審議事項・報告事項
- 2) 平成23/24/25年度理事・評議員・監事（改訂）
- 3) 日本インテリア学会会員数（10月12日現在）
- 4) 名誉会員の推薦基準について
- 5) 研究協議会報告（栗山）
- 6) [提案] 特別テーマ研究グループ等への助成制度新設について（栗山）
- 7) 平成24年度第1回理事会議事録

議 事：

上野総務委員長の司会、直井会長の議長により、平成24年度第2回理事会の議事進行がすすめられた。

1. 会長挨拶
  - ・理事会に先立ち直井会長より挨拶があった。
2. 第24回大会実行委員会委員長挨拶
  - ・大会実行委員長の東北文化学園大学野崎淳夫教授より大会開催について挨拶があった。
3. 故内藤昌先生のご逝去について
  - ・本学会の副会長、歴史部会長を務められた内藤昌先生の逝去について報告があった。
4. 定足数の確認
  - ・理事27名のうち、出席者数19名、委任状4通で、理事会の成立に必要な定足数を充足していることが確認された（理事の1/2）。
5. 役員の確認（支部長・部会長）
  - ・資料2の通り、改訂した平成24年度理事・評議員・監事の名簿を確認した。歴史部会長の部会長を内藤理事から河田理事に変更した。
6. 事務局移転後について
  - ・本年度4月から学会事務局を千葉工業大学に移し、入退会や会費納入に関する業務担当、事務局の押切氏が紹介された。
7. 会員の入退会の承認
  - ・2012年10月12日現在の会員数は、正会員329名、準会員36名であった。
  - ・資料3の通り、前回から10月12日までの新入会員21名、退会者9名について了承された。

8. 部会費の配分について

- ・各支部長に配布された昨年度の予算振込状況の資料で、東北支部が記載されていないとの指摘があり、確認の上、連絡する。

9. 島崎信顧問への協力依頼

- ・島崎信前副会長に顧問への就任を要請し、快諾を得た。今後、インテリア学会と業界のつながりを深めるために尽力をお願いする。次年度の総会で活性化案を提出予定。

10. 名誉会員の推挙・推薦基準について

- ・平成15年1月24日に理事会で承認された申し合わせ事項をもとに、名誉会員の推薦基準について検討し、方向性は了承された（資料4）。
- ・「推薦を受ける資格」は必要条件とし、「その他特別な功労」については、「事務局長役」も含む。
- ・申し合わせの解釈については、表現変更の必要があるため、検討を続ける。故前副会長内藤昌氏の推挙が承認された。

11. 研究協議会について

- ・研究協議会代表幹事の栗山理事に代わり、川島理事より、資料5について説明があった。
- ・インテリア学大系特別部会およびCAD部会の終了、インテリア環境評価部会および現代インテリア研究部会の新設が承認された。
- ・「特別テーマ研究グループ等への助成制度新設について」（資料6）説明があり、制度の発足は了承されたが、会費収入の減少などから、予算配分については更に検討が必要となる。若手研究者への支援として考えることになった（松本（直））。

12. 支部報告

- ・特に緊急を要する審議・報告事項なし。

13. 部会報告

- ・特に緊急を要する審議・報告事項なし。

14. 委員会報告

- ・特に緊急を要する審議・報告事項なし。

15. AIDIA 関連

- ・特に緊急を要する審議・報告事項なし。

16. 第25回大会の開催について

- ・特になし。

## 17. その他

- ・西出副会長より、大会発表の中から奨励賞（例：ベストプレゼンテーション賞等）を授与してはどうかとの提案があり、次年度からの実施が承認された。詳細については、今後検討を進める。

以上

## ■事務局より

今回はありません

## ■連載『インテリアの行方』

### 猫は心地よさの鑑定家

早野 由美恵（東北芸術工科大学）

19世紀のロシアの小説家であり、思想家のフォードル・ミハイロビッチ・ドストエフスキーの言葉「お前の部屋を見せるがいい。そうすれば、お前の性格を言い当てて見せよう。」は、インテリア空間と人との関係を適切に表している。最近高校生を対象にして、家具と空間模型を作成するというワークショップを何度か開催した。それに参加した生徒たちは名前を見ずに作品の雰囲気で作作者が誰かを言い当てており、その言葉を思い出した。また、長い間住宅設計に関わってきて感じる事は、インテリア空間はそこに居る人（たち）の思考、好み、性癖までも写しとるように似て来ることがある。それは、色々な情報に影響を受けながらも意識的に、また、無意識的に自分にとって心地よい空間を自然と創造しているのだと思う。

心地よい空間と言えば、猫は、その家で一番心地の良いところを知っている。と言われた記憶がある。確かに暑い夏の日には、心地よく風の通る涼しいところでのびのびと寝ているし、寒い冬の日には日だまりの特等席を譲らない。そして、心地よさと猫に関する名言もいくつか存在する。

「ネコはどこに座れば不便になってしまうか、その正確な場所を数学的に計算できる。」パム・ブラウン（作家）

「犬が膝に乗るのはあなたが好きだから。でも猫が同じことをしても、それはあなたの膝の方が温かいからだ。猫は心地よさの鑑定家だ。」レオナルド・ダ・ビンチ（画家）

現在勤務先近くのアパートで猫と暮らしている筆者と

しては、哀しくも否定しきれない名言だと納得している。しかし、このアパートは「ペット可」ではあるが、残念ながら設備的にはペットとの同居用には整えられていない。昨今はペット同居型の賃貸も整いつつあるが、地方には未だまだ充実したものではない。

以前は、犬は外で飼われていることが多く、猫も飼い猫と、野良猫でも色々な家でご飯を貰い、色々な名前で呼ばれていたというような話は、そこかしこで聞いたものだった。

しかし、現在は室内犬の割合は30%、猫に至っては60%を超えているとのデータもあり、（全国犬猫実態調査 一般社団法人ペットフード協会HPより）その理由としては少子化やペット可の賃貸、集合住宅の増加も要因のひとつと考えられている。

さて、ここでペット（私の経験は猫なのでここでは猫に限定して進める）が入り込んだインテリア空間というのは、人だけの時とは明らかに異なる。キャットタワー、ペット用トイレ、爪研ぎ、ご飯・水飲み場、猫草置場、ゲージ等簡単に列記しただけでこのようなものが空間に設置される。そして壁や床の傷つき防止や防臭機能、建具等の脱走防止用設備 等空間や設備にも専用の措置が必要となる。猫と暮らし始めて数十年（もちろん猫たちの世代交代はあった）となるがこんな失敗もあった。2匹の猫を飼っていた和風住宅の新築設計を依頼された。新しい建物には猫の主要通路には専用の小窓を設け、その他様々な措置を行った。既存の住まいも和風であったことや猫もおとなしく、悪さはしないという事であった為障子のある部屋が多くなった。しかし引き渡し直後猫たちは環境の変化に興奮し、相当数のあった障子を殆ど破いてしまった。クライアントは「好きなだけ点検すれば気が済むでしょう。しばらくたったら張り替えるわ。」とゆったりと構えられており、恐縮してしまった。後日訪れた時、確かに障子はきれいに張り替えられ、それはその後も保たれていたのだが…

ペットと共生する住空間のインテリアは、現在発展途上にある。猫専用色々な設備を用意しなくとも彼らは勝手に快適なところを見付けるかもしれない。しかし室内飼が多くなって来た現在、猫にとってもその選択肢は少ない。人間の方としても、ペットとの共存を選択した時点において、その空間の方向性がある程度決まってしまうのかもしれないことと、見た目の快適性も損なわれることが多いように感じる。ペット共存というインテリア空間との関わりの中では、お互いに快適な方向性を求める道は今始まったばかりに思える。



## ■書評

### □求道学舎再生



近角巖子  
『求道学舎再生 集合住宅  
に蘇った竹田五一の大正建  
築』学芸出版、2008年

河崎昌之（和歌山大学）

1926年竣工、鉄筋コンクリート造3階建ての学生寮、武田五一の設計による「求道学舎」。80年近くの歳月を経て老朽化、そしてしばし放棄されていたこの建物の、11の住戸からなる集合住宅への転生を、本書は追う。

この改修事業には、学舎に先立ち修復された、隣接の宗教施設「求道会館」の運営費捻出という背景があった。同じ武田作品で、文化財指定を受け、往時の姿を取り返した同会館とは対比的な、学舎再生への道のりである。

そのため、設計者である著者らは、収益性の観点から、歴史的な建物の活用を模索する。そこで「つくば方式」<sup>1</sup>として知られる「スケルトン型定期借地権マンション」を参照し、また、この事業に賛同する入居者を募るため「コーポラティブ方式」<sup>2</sup>を採る。

作品を構造体へと還元し、そこに〈住戸＝インテリア〉をインフィルする一だが、ことはこの一文ほど単純ではない。参じた将来の住み手たちは、武田の空間に魅せられる一方で、それぞれが、そこに自身を反映させようとする。規則正しく寮室が並ぶ平面を変容させるとき、施主と設計者は、武田の手によるこの建物の魅力を改めて、問わねばならない。

事業性と作品性の競合を、設計者たちはいかに解いたか。建物の長寿命化とインテリアの関係を考える上でも好著である。（かわさき・まさゆき）

### □見る測る建築 遠藤勝勸 TOTO 出版

湯本長伯（広報委員長・九州支部長）

スケッチと実測を通して見た建築設計の書。遠藤氏は、言わずと知れた、菊竹清訓氏の永年のパートナーで、菊竹建築にリアリティを与え続けた偉大な建築家で

ある。しかし、その設計作法は、『良い実物を見て、深く味わい』、そしてそれを徹底的に理解するために『細部まで測り、実測スケッチし、実測図を描く』という、手技で支えられた、実践的なものである。スカイハウス以降の菊竹作品の中でも、徳雲寺納骨堂（久留米市寺町）、出雲大社庁舎（出雲市）、佐渡グランドホテル（佐渡市加茂歌代）、東光園（米子市皆生温泉）、都城市民会館（都城市甲斐元町）等々、都市・インテリア・建築が希望に満ちていた頃の建築設計を支えた、ディテールの秘密が分かるような気がする貴重な書である。香山氏の推薦の辞も良い。

香山壽夫「どのように学ぶべきかと問われ……良いものを見、そして自らの手で描き留めよと。（中略）若い飢えた人々は、この本の中に必ず何かを見いだすであろう。……」



### □住宅の仕事 白の数寄屋 吉田研介40年40作



バナナブックス  
（チキンハウス吉田研介自邸）

湯本長伯（広報委員長・九州支部長）

代表作であるチキンハウス、とは長らく建築家として、東海大学工学部建築学科教授として活躍された、吉田研介氏の自邸の名称である。彼らは「都市住宅世代」と呼ばれた一時代の人たちだが、何故か氏はいつも独立独歩だった。40年以上経った今、その意味を考え直すことは、大きな意味があるだろう。自邸をはじめとする住宅は極めて抑制されたもので、モダンアーキテクチャの典型であるが、チキンハウスはそこに設計者＝住み手の人格や生き方が、滲み出ている名作である。建築家の中にもファンが置く、北山恒氏（横浜国立大学建築学科教授）や千葉学氏（東京大学建築学科准教授）など、あちこちで論評している。

住宅と住宅のインテリアを考え直すためには、恰好の教材なのではないか？学生より大人が触れるべき内容である。

## ■ 編集後記

若井正一（日本大学）

本会報No51号は、恒例の本会全国大会記念号です。第24回大会は、震災復興著しい仙台市に立地する東北文化学園大を会場に、無事終了することができました。同大会の詳細は、本号に掲載されていますので会員諸兄にご高覧いただければ幸甚です。なお、同大会をお引き受けいただいた大会長の野崎淳夫教授をはじめ、同大学関係各位の諸兄に深謝いたします。

さて、本号の編集長（若井）をご指名いただきましたが、実質的な編纂作業は、そのほとんどを九州大学の湯本先生と当該事務ご担当の佐藤恭子さんによりまとめられたものです。ここに、日頃の編纂作業のご苦勞に対して御礼を申し上げたいと存じます。

湯本長伯（九州大学）

今回は、珍しく会長の原稿が遅くなりましたが、他の方々の原稿も幾つか抜けてしまいました。やはり年度末

になる前に、会報は発行する必要があるようです。今号は大会後で総会前号になりますが、また総会で会員の皆様にお会いできることを楽しみにしております。永い間、九州大学でお世話になって参りましたが、今年度末で定年退官し新しい大学での生活となります。今後とも、宜しく願い申し上げます。

### ■日本インテリア学会会報第51号（2013. 3. 31発行）

編集者：若井正一、湯本長伯

発行者：直井英雄（日本インテリア学会会長）

広報委員会：湯本長伯、片山勢津子、平田圭子  
松田奈緒子、若井正一、渡辺秀俊  
interior@design.kyushu-u.ac.jp

### ■事務局

日本インテリア学会 事務局 押切泰子

〒275-0016 千葉県習志野市津田沼2-17-1

千葉工業大学 上野研究室気付

電話：080-2386-5652 FAX：047-478-0552

e-mail: jimukyoku@jasis-interior.jp